

HYPERFLASH

別府湾会議を振り返って 公文俊平

ハイパーネットワーク社会研究所所長



●2日間にわたって議論が交わされたメイン会場風景

昨年の11月24日から25日にかけて、ハイパーネットワーク'95別府湾会議が、新設のビーコンプラザで開催され、海外からの多数の参加者を含む500名を越える全国のネットィズンたちが、「ネットィズン革命」をテーマとして熱気のこもった議論を繰り広げると共に、相互の交流につとめた。この会議は、1990年からほぼ二年おきに開かれていて、今回が第四回である。回を重ねるごとに参加者の数も増え、今では大分での恒例のイベントの一つとなっている。

会議の冒頭で、私が問題提起の

発言を行って、1990年代をネットィズンが主導する「デジタル／ネットワーク革命の十年」、「サイバースペース出現の十年」として位置づけ、この流れの中で、"コミュニティ・ネットワーク"を早急に構築する必要性を指摘すると共に、過去の市民革命に匹敵する"ネットィズン革命"の時代が始まる可能性を示唆した。

続いて、"ネットィズン"という言葉を最初に作ったアメリカのマイケル・ハウベンが、この言葉の由来や含意についての基調講演を行い、それを受けたハワード・ライン

ゴールドが、インターネット上のコミュニティは、今やアメリカや大都市だけに限られなくなったとして、大分を拠点とするコアラが、WWWの上でリーダーシップを持ちつづけることを期待するとのべた。コアラの尾野事務局長は、大分でのマルチメディア地域実験の進捗状況を報告すると共に、地域情報化の今後の進むべき方向についてのビジョンを提示した。コアラの会員たちのデモによって、彼らが短期間でホームページの作成技法をマスターして、非常に興味深い発信活動（同時にパブリック・コミュニケーションでも、グループ・コミュニケーションでもあるような活動）を活発に続けていることを目の当たりにして、参加者たちは等しく感嘆した。

各セッションの発言としては、第二セッションでのNTTの加納貞彦による情報コンセントの構想や、ハリー・ソールによるスマート・バレーでの高速・無料のイン



●会議終了後、全員そろっての記念写真

ターネットアクセス機会を市民に提供する試みの話、デービッド・ファーバーによるアメリカのインターネットは反動期に入ったという指摘などが印象に残った。第三セッションで紹介されたインターネット関連の各種の新技術や新しい可能性の紹介も興味深かった。恒例の夜のセッションでは、マルチメディア・コンテンツの制作の様々な試みが披露され、観衆を沸かせた。

第二日目は、午前中、教育、医療、行政・政治、ビジネス等四つの分科会に分かれて討論を行った後で、まとめのセッションに入った。そこでの議論を通じて、自分たちでリスクを受けながら、双方向のコミュニケーションとコラボレーションの可能性をさらに発展させるための自由な試みを発展させたいという意欲に満ちた人々が多いことが明らかになった。しかし同時に、"西部劇"的でない時代、

つまりインターネットのフロンティア精神には必ずしも主導されないコミュニティの存在も考えに入れておくべきことも指摘された。

最後に、会議全体を通じての印象を列挙してみたい。

何よりもコアラのエネルギーの素晴らしさにあらためて感銘を受けた。分科会で報告されたことだが、大阪で開かれたAPECでインターネット回線を民間主導で張りめぐらせたのは快挙といえよう。大阪は、ネットワーク革命で東京の、中央政府の、一步先に出たようだ。ハリー・ソールやデービッド・ファーバーが、日本の自治体の情報化の試みはアメリカに負けていないと評価したことは、われわれに自信を与えてくれた。野村総研の村上研究理事が、ネティ즌たちの先導的な役割を念頭に置きながら、野村総研の役割は企業や政府をネットワーク革命に引き入れることだとしたのも興味深かった。

ビーコンプラザの会場はやや広すぎて、参加者間の個体距離が大きくなりすぎたために、一体感を醸成しにくくなり、そのためもあって議論がやや拡散した嫌いがあった。また、インターネットが"反動期"に入って、さまざまな規制の網がかぶせられてくることを危惧するファーバーが、議論しているだけではだめだ、もっと直接的な行動に立ち上がる必要があると檄を飛ばしたのは、アメリカと日本との間の位相のずれを示すもののように思われた。

ともあれ、全体としては、今回の会議も大成功であったといってよいだろう。次回の会議では、地域実験のさまざまな成果が報告できると同時に、"コミュニティ・ネットワーク"の構築の具体的な試みについて、全国各地の経験の交流が行われるようになっていることを、期待してやまない。

別府湾会議報告

別府湾会議発表者の講演タイトルと要旨

●セッション1～セッション2 《ネティ즌革命》

◆ネティ즌革命とハイパーネットワーク社会 公文俊平(ハイパーネットワーク社会研究所)

別府湾会議も1990年に始まって4回目を迎えた、この1990年代は後世に「サイバースペース出現の10年」と呼ばれるようになるだろう、これにはインターネットが非常に大きな役割を果たした。このサイバースペースの爆発をもたらしたのが「ネティ즌」と呼ばれる人達、彼らはネットワークに棲んで「智業」に従事するが、企業とも協働(コラボレイト)していく、企業はそうしたネティ즌にビジネスや智業を行うためのプラットフォームを提供するようになるだろう。民主主義の政治システムがもたなくなりつつあるいま、とりわけ中央よりも各地域において、それぞれのコミュニティが高度に発達したネットワークを持つことが「ハイパーネットワーク社会」の形成に必要な条件である。これは21世紀まで待っているわけにはいかない、広帯域のネットワークが利用できるようあらゆる工夫をしておく必要がある、それが「コミュニティ・ネットワーク」がいま直面している課題である。

◆ネティ즌革命とコミュニティ・ネットワーク マイケル・ハウベン(コロンビア大学・“ネティ즌”創案者)

オンラインのディスカッションというのは暖かい、しかも思慮深いコメントをくれ、参加している人達のことを配慮している点に気がついた。そういった文化がどこからきたのか、あるいはどのようにして生まれてきたのかという点に関心を持った。「ネティ즌」というのはオンラインの世界を、あるいは「ザ・ネット」をより大きく発展させるために積極的に参加する人たち、共同作業の価値を知っていて、パブリックなコミュニケーションの持っている価値を知ってる人たち、彼らはネットを単なるサービスだと考えず、総ての人がネットをより活力のあるものにするために自らが努力し、行動しなければならないと考えている。限られた人だけが使うならば、ネットワークは知的な機会の断絶をますます広げてしまう。ザ・ネットは人間社会、人類社会に貴重なインパクトを与えてきた。人々の生活をより豊かにするというインセンティブを、ネットワークへのアクセスを全て可能にすることで、社会全体に広げていき、アクセスが総ての人に与えられることで改良されていくと思う。

◆韓国のコミュニティ・ネットワーク

キョン・ヒー・ユー

韓国では「元老坊」というネットワークが3年目を迎える。今のところ全国で約2400名の60歳以上の会員があり、11カ所の地域に出来た。「福祉情報通信協議会」をつくって、国や社会からの寄付金、補助金などを集め、教育施設を増やして全国的に広げようと考えている。高齢者たちの特徴の一つ目はお金がないこと、二つ目は病気で弱いこと、三つ目は疎外されていること。一つ目と二つ目は「元老坊」の問題ではないが、三番目のことは対応できる。

◆ONE PERSON ONE HOMEPAGE

ニューC O A R A会員有志

村上正人 コアラがインターネットに接続したのが1994年の7月、「OnePerson, OneHomepage」が公開されたのが10月。インターネットは女性の数が少なく、女性のホームページにメールがたくさんいく。今日はコアラの女性を中心に紹介する。

山崎佐和子 95年秋冬物の発表。セーターを編む度にホームページを作る。セーター編まないとホームページが作れない。

別府湾会議報告

友成美保 クリックしていくと、クイズ形式に答えると、各時代の私に会える、写真のクイズ形式。それとOLのバッグの中身公開、これなんか結構どきどきすると思う。

帆足美佐子 1ページ、1ページ開いていくごとに全然違う、私の印象を見る人に与えたい、そういうページを作りたいと思って頑張っています。

高橋明子 大分で出会った素敵なお人、地域の情報化についてなど、私が記者になって、この大分で起こっていること、このコミュニティの中で私が楽しんでいることを、愛車に乗って皆さんにご招待したいというページです。

エリック・カセバウム 日本の田舎のプレゼンスがインターネットでは全然ない。東京や大阪はいっぱいある。しかし田舎のホームページはない。世界中の人々は日本のハートを勉強したい、日本の生活を勉強したいはず。

永野美恵子 夫婦そろって音楽が大好きで、20年続いている手づくりの小さな音楽祭がある。音楽ホールもない湯布院町にある素敵な音楽祭のことをぜひ世界の皆さんに知っていただきたいと思って、英文を添えて、季節の色を盛り込んだ私の手書

きの絵を交えて発信している。

村上正人 別府市のホームページ、最初は個人の趣味で始めた、7月に市役所の中で異動があって、ホームページを作る担当のところになった。

尾野徹 小さい単位の行動が、地域単位でも個人でも起こってくる、それが「ネティ즌革命」ということ。それを実現するために地域に「情報コンセンタ」を、24時間使いっぱなし、数メガの光ファイバーのコンセントだけでなく、銅線も用意したい。28.8kの一番低速のものも。IPアドレス付で、家庭や職場に自由に持っていくことができる。また、コミュニケーション型の「WWW電子会議」をつくる。WWはデータベース指向が強い、コ

アラの中にも飽きてる人が多い。世界をあちこち見て回った地域市民が誕生してきている、そういう人たちが電子メールでコミュニティを作っている。電子メールのコミュニティと今までの体験共有型の地域コミュニティとを組み合わせて、新しいマルチメディア電子会議システムを作りたい。加えて「地域情報化委員会」というものも作りたい。いま準備委員会を作っている。この情報化委員会が非営利と中立、公共性の本質を持てるようチェックし、また運営がスムーズに民主主義を擁護する形で行われるように監視しよう。

◆ハワード・ラインゴールド

コアラのプレゼンに感嘆。これは



●コアラ会員有志が各自のホームページ拡大ポスターを背にしてプレゼンを行った

別府湾会議報告

コミュニケーションのメディアであって、しかも少数の人に制御、管理されているのではない、政府とか企業が少数で管理しているわけではなく市民が一緒になって作り出している。総ての人の机の上が印刷機になったり、放送局になったり、テレビステーションになったり、アートギャラリーになったりしている。残念なことに、世界の政治的な指導者の人たちが自分たちのコントロールがなくなることをおそれている。

◆OCN（オープン・コンピュータ・ネットワーク）と地域ネットワーク
加納貞彦（日本電信電話株式会社）
なるべく安くOCNを提供したい、電話局あたり20ユーザーぐらいが集まれば、そこにもっていこう、地域の住民でそのぐらいの方を集めれば、そういうところに引かせていただきたい。ぜひコアラの熱気を日本全国に広めていただきたい。

◆シリコンバレーをスマートバレーに
ハリー・ソール（スマートバレー公社前CEO）
「パブリック・アクセス・ネットワーク」という6月から開始したプロジェクト、これは今までの形でのインターネットのアクセスを持っていない人を対象にした。情報が得られない問題があり、市民に高速で無料

のアクセスを提供する。地域の中に10カ所のアクセス場所がある。新しく来る人たちが迷わず使える方法を進めている。

◆コミュニティ・ネットワークの新しいアーキテクチャーとは
デビッド・ファーバー（ペンシルバニア大学教授）

いま家庭にあるのは、高速のモデムかISDN、それ以上のものは限られた実験でしかない。いろいろな試みがうまくいくなら、双方向で10Mから100M程度の高速回線を家庭に全部デジタルで提供することが出来るようになる、また無線や衛星通信の試みもいろいろある。

●セッション3

《テクノ・プレゼンテーション》

インターネットのホット・テクノロジー・レポート

◆インターネット・フューチャー
村井 純（慶應義塾大学助教授）
我々の任務は利用者が増えても耐えられるようにすること、それからビデオと音声の環境が動くかということ。私が関心持っているのは、家庭をどうやってつなぐかということ。それには地域系の基盤が大事。日本ではISDNがどこでも手に入るという状況は自慢できる。携帯電話とP

HSが広まってデータ通信が始まる、それが相当早い速度になる。PHSもISDNと連繋してつながる。非常に安い価格で、専用線を家庭に、と繰返し言っているとだんだんNTTの方もその気になるので、皆さんとも力を合わせて言い続けることが大切。

「インターネット・ワールドエキスポ」、T3のバックボーンをヨーロッパ、アメリカ、日本、それから多分韓国に引く。1年間だけ、いろいろな規制レーションを許してもらう、ビジネスとしてのリスクを負えない部分を実験としてやる。それから日本にはNTTのマルチメディア実験の枠組を利用して、16カ所のNOCが出来る。

◆インターネット・エキスポ

伊藤穰一（エコシス代表）

エキスポのテーマ館は竹村真一氏が中心にやっている。「ミーティングプレイス」というコミュニティを作っていく。先端技術としてVRMLは大体のプラットホームで動く、まだデータが大きかったり、制限がある。

◆大分大学のVRML

西野浩明（大分大学工学部）

VRMLで見る大分大学の工学

別府湾会議報告

部キャンパスを実演。リンクが幾つかあって、建物が別のページへのリンクになっており、クリックすると、別のVRMLのページに移ることができる。

◆InterServによる情報システムの改革
佐々木豊（NTTデータ通信）
データベース管理システムとインターネットウェブサーバーをつなぐ、ミッシングリンクを埋めるためのパッケージ「インターラブ」を開発した。WWWとデータベース管理システムの統合を試みている。

◆ネットワークの中のソフト

ウェア・エージェント
浅川和雄（富士通研究所）
いろいろな機能がインターネットで活用されて複雑性が増し、普通の人が利用するのは難しくなる。エージェントを埋め込み、難しいところを吸収して、できるだけ使う側は直感的な命令、あるいは操作だけで、サービスを得れるようにしたい。そこで、ネットワーク上に自分の代理人になるパーソナルエージェントと通信エージェントを住まわせておいて、この仮想エリアにあるエリアエージェントとの対話によって最適な通信手段で通信することができる。

◆大衆化へのCD-ROMの活用

森下政信（日本電気）
ネットワークに入るために、操作性が難しい、料金が高い、遅い、つながらないなど、いろいろと課題がある。CD-ROMのコンテンツの構造をハブとして、いろいろなところに飛んでいく。ネットワークを意識しないで使えるCD-ROMを提供する。これはネットizenになれない普通のシティzenが自由にネットワークに入っていくインターフェイスとしていいのではないか。

●セッション4

《デジタル・プレジャー》
デジタル・コンテンツの創造・制作・流通をめぐっての発表が真夜中まで行われた。なかでも映画制作におけるコンピュータ・グラフィックスの制作の模様を、映像を見せながら語るマイケル・バックスが圧巻であった。
・都市メディアとしてのテレビとインターネット
濱田耕作（東京メトロポリンタンテレビジョン）
・デジタルハリウッドの最新トレンド
マイケル・バックス（『コンゴ』プロデューサー）

- ・最強のデジタル・プロダクション
服部裕之（株）ビー・ユー・ジー代表）
- ・YELLOWSで見たもの
江並直美（デジタローグ代表）
- ・自己組織化によるネットワーク・アートの可能性—未来都市—「ギガポリス」ベネチアビエンナーレ出展作品より
河口洋一郎（CGアーティスト／筑波大学助教授）

●セッション5

《分野別テーマ討論》

- ◆教育 ネットワークを学校に
- ・肩肘張らずに「じゃぶじゃぶ」と！一小学校2年生のネットワーク活用事例報告
中川一史（横浜市立中川西小学校教諭）
 - ・非情報系学生のための情報処理教育への取り組み
渡辺律子（大分県立芸術文化短期大学）
 - ・ガイアプロジェクトの実践
藤田賢一郎（上越教育大学学校教育学部附属中学校）
 - ・学校を拠点とした地域ネット『ミカンネット』の活動
吉富一樹（熊本県天水町立小天小学校）
 - ・世界の子供たちを結ぶ—APIC-NETの実践報告

別府湾会議報告

金子洋子 ((株) グローバルコモンズ)
・アップルと国際大学グローコムの
共同プロジェクト『メディア
キッズ』の概要紹介

■コーディネーター：新谷隆・豊福
晋平（国際大学 GLOCOM）

課題は教育の現場で日常的に使っ
ていくネットワークを構築すること。
もうひとつはコミュニティを作ること。
学校間の交流を促進する
バーチャルなコミュニティを日本中
に世界中に作っていくことが大切。
学校としての課題、とりわけ教師の
役割が、これまでと違った形になる。
教師が一方的に子供に教えるとい
う世界から、モダレートをしてい
くタイプになっていく。現場の先生
からは、行政に対してはお金をくだ
さいということ、とりわけ地域のサ
ポートに非常に期待をしている。コン
ピュータ通信の業界に関しても安い
ハード、ソフトの提供、安い回線の
提供をどんどん促進していただきたい
という現場の強い要望を感じた。

◆医療・福祉 マルチメディア実験の紹介
・市民カードシステムから保健、福
祉、医療システムへの高度利用に
おける考察

今泉浩太郎（佐伯市環境保健課）
・脳神経外科とマルチメディア

下村剛（大分医科大学脳神経外科）
・寝たきり高齢者をネティ즌に！

内田斉（アライドコンサルティング株式会社）
・People『福祉工作クラブ』の試み
—パソコン通信やインターネット
が拓く障害者の自立

関根千佳（日本アイ・ピー・エム株式会社）
・医学教育と医療診断支援のための
マルチメディア・ネットワークの可能性
吉田敏（大分医科大学）

■コーディネーター：吉田 敏
(大分医科大学)

医療福祉ということで、なぜ今まで
医療福祉にネットワークがうまく
動いてないかということについて、
医療サイドと行政サイド、及び市民

サイドの間のコミュニケーションの問
題が浮かび上がった、お互いに情報が
やりとりできない、ためになる情報が
取れない、これはネットワークをうまく
使う教育システムを作ることによつ
て、情報のやりとりが出来るように努
力しないといけない。やはりやる気にな
れば出来るということ、行政サイドも
やる気になることが大事だ。特にこ
れから21世紀に向かって、老人社会
になる、我々が老人になるという自分
自身の問題として考える必要がある。
経験から老人はマルチメディアに対応
出来ない人たちではなく、むしろマル
チメディアに关心を持つてゐる人たち
である。努力して使いこなそうとして
いる。マルチメディアは、我々の考える



●2日目の午前は4つの分科会が行われた。写真は市民/行政/政治に関する分科会風景。

別府湾会議報告

以上に老人に親しみの持たれるような技術ではないか。

◆市民、行政、政治とネットワーキング

- ・ネットワーク・デモクラシーの実験
原秀介(コミュニケーション・コーディネーター、ネットワーク・デモクラシー研究会幹事)
- ・政党によるインターネットでの情報発信の試み

岡本健司(新党さきがけ事務局)

- ・香川県の地域情報ネットワーク整備
谷本善睦(香川県地域情報化推進協議会)
- ・プラットホームとしての「地域の情報通信基盤(RII)」の整備
—APECインターネット・プロジェクトを踏まえて

浅野幸治(大阪府企画調整部情報政策課)

■コーディネーター：杉井鏡生(インフォメーション・コーディネーター)

行政については、新しく情報を提供する仕組みとしてネットワークが可能性を持ってきた、しかし、一方でどうやってコミュニケーションの部分を作っていくか、市民と行政の間では情報提供サービスというのが重要だが、それだけではなく、次のステップのところでコミュニケーションを実現していくためには、行政自体、行政の組織の情報化、それからネットワーク化がないと簡単には進まない。

政治においても、政党が情報提供していく場合、情報提供はできて、その次のステップでコミュニケーションを市民等の間に持っていくことは、行政と同じように、それに対応できる体制をどう作っていくかという問題がある。それから市民が活動をしていく上で手間が大きなものになる、例えばネットワークデモクラシーという活動の中でも十分に対応しきれない問題もある。

◆ビジネス 新しい産業と市場

- ・デジタル素材の流通プラットフォーム
猪熊洋文((株)ミスミ取締役)
- ・バーチャル・カンパニーからサイバービジネスへ
細江治己(サイバースペースジャパン)
- ・サイバーパブリッシング実験の成果
西岡貞一(凸版印刷メディアセンター)・
学生起業家から見たネットワークビジネス
國分裕之((資)スプレッドエム
フォー社長・CEO)

■コーディネーター：藤元健太郎(野村総合研究所研究員)

インターネットを利用するビジネス、利用を助けるビジネスはいまのところ成功している、実際にその上で新しい商業をやる、サイバービジネスと呼べるビジネスはまだこれからの段階、何よりも利

用者を増やしていく必要がある、特に女性を含めて増やしていく必要がある。それから大企業とベンチャー、どちらが有利か、やはりベンチャーが多いという議論が盛り上がる。

●セッション6 ハイパーネットワーク社会 発展のシナリオ

◆地域ネットワークを支える社会システムづくりの課題、問題点

- コーディネーター：月尾嘉男(東京大学工学部教授) & 浜野保樹 & 金村公一(国際大学GLOCOM)

◆立命館アジア太平洋大学(仮称)の基本コンセプトと展望

- 坂本和一(立命館大学副総長)
別府市の十文字原に1999年の開学を目指す新しい大学について。第一のコンセプトは、この大学をこれまで日本で実現しなかった、国際化され世界に開かれた大学に、第二番目にアジア文明と西洋文明の融合した21世紀型の新しい文明、第3番目のコンセプトは、本日この会議での主要テーマであるネットワークを最大限に活かした大学を作りたい。

◆サイバービジネス・ケースバンクについて

- 村上輝康(野村総合研究所研究理事)
慶應義塾大学と野村総研で始めたサイバー社会基盤研究推進センターとい

大分 NOW

-IWEへの取り組み- The Internet 1996 World Exposition



●リニューアルされたコアラホームページ

平成8年1月1日から12月31日までの1年間、インターネット上でIWE (The Internet 1996 World Exposition) が開催されている。大分県のニューCOARAでも、IWEへの参加に向けた取り組みが始まっている。その一つが、元旦にリニューアルされたニューCOARAのホームページである。お馴

染みの別府湾のイラストが、新たに3Dで作成された。ホームページにアクセスする度に、大空を舞うカモメのように、いろんな角度から別府湾を眺めることができる。また、米国のコーネル大学で作成されたフリー ウェア CU-SeeMe を用いて、インターネットへ映像を発信する試みも進められており、現在、佐賀関町の海星館からの映像が既に発信されている。平成8年の初日の出の映像が、ここから発信された。現在は海星館から見えるすばらしい眺望に加え、条件のいいときには望遠鏡で見た太陽のプロミネンスの生中継影像等も発信されている。更に高崎山自然動物園、B-CON プラザのグローバルタワーからの映像発信も実現に向けて検討が進んでいる。



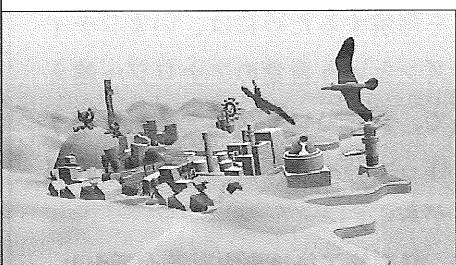
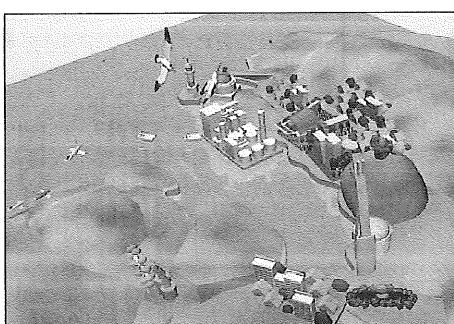
大分関崎展望台

現在コアラではCU-SeeMeで関崎展望台の画像をリアルタイムでお送りしています。
CU-SeeMeのアドレスを192.244.1.146にセットして接続して下さい。

CU-SeeMeはインターネット雑誌などのCD-ROMに付属してあります。

<参考>

IWE日本事務局 : <http://133.246.8.20/Japan/index.html>
ニューCOARA : <http://www.coara.or.jp/>
コーネル大学のCU-SeeMe : <http://cu-seeme.cornell.edu/>
佐賀関町の海星館の映像リフレクター : 192.244.1.146



●コアラホームページへアクセスするたびに別府湾のイラストが次々に変化します。

●O-brainの活動紹介

ハイパーネットワーク社会研究所では大分県情報化委員会準備会のオブザーバーをお願いしている地元大分の大学の先生方をメンバーに月1回の定例研究会を昨年から行っている。これ

まで大分大学工学部の西野浩明さんから「VRMLの最新動向について」、大分芸術文化短期大学コミュニケーション学科の・凍田和美さんと渡辺律子さんから「情報教育の実際」、別府大学短

期大学部の森田均さんから「ネットワーク上の仮想都市」というテーマで研究発表をいただいた。今後はメーリングリストなども活用してより幅広く活動していくつもりである。

所員のアウトプット

■公文俊平<雑誌記事>

- ・「Forbes」1995/8月号
「マザーテレサ」「インターネット」こういう言葉は忘れるこだ
- ・産経新聞 95/8/30 正論「過渡的性格強い米通信法改正」
- ・「The Nikkei Weekly」日本経渃新聞社 95/9/18 "Young will lead the way in info age"
- ・「MEDIA FRONT」1995/8号
公文俊平、浜野保樹対談「情報産業革命の行方」
- ・単行本「21世紀への構想」社会経渃生産性本部編（サンドケー出版局）
「情報ネットワークの中で活躍するネティズンが革命を起こす」1995年9月
- ・「経渃界」1995/11/7号
「シリーズ提言：情報革命をリードしうる情報通新政策を」
- ・「科学技術ジャーナル」（財団法人科学技術広報財団）1995/11月号
「視点：突破段階の技術と産業」
- ・「月刊 Keidanren」（社団法人経渃団体連合会）1995/11月号
「高度情報化社会とわが国の対応」
- ・「Asian/Pacific Book Development」（ユネスコアジア・シフィック文化研究所）1995Vol.26 No.2 "A Perspective on the Significance of the Information Revolution"
- ・「中(fai)」（株式会社富士総合研究所）1995/12月号
「デジタル革命のカギはなぜ、インターネットが握るといわれているのか？」
- ・「週刊エコノミスト」（毎日新聞社）1/2・9迎春合併号
「「個」がパワーを持つネットワーク革命の衝撃」
- ・「産業立地」（財団法人日本立地セツ）1996/1月号
「ティジタル革命の将来を見通す」
- ・「季刊コングレス＆コンベンション」（株式会社アイシーエス企画）1996/No.50
巻頭インパクター「コンピュータネットワークがつくる21世紀の社会とコンベンション」
- ・「LOOK JAPAN」1996Jan No.478号
"Economic Feature: Are we sitting comfortably? (Plan for Japan's Information Future)"
<講演・講義関連>
- 11/17 労組幹部政策懇話会
講演「マルチ・メディア社会の未来」
- 11/24 ハイバーネットワーク'95別府湾会議基調講演「IT革命とハイパー・ネットワーク社会」
- 11/28 インターネットウェイブ'95 基調講演「21世紀のネットワーク社会」
- 12/6 新進党朝食勉強会 講演「高度情報通信社会の実現」
- 12/6 NECエグゼクティブサロン
講演「新しいネットワーク社会の実現に向け」
- 12/7 早稲田大学 講義
- 12/12 大分県立芸術文化短期大学特別講座
「日本の半世紀と世界の半世紀、そしてこれから時代」
- 12/13 大分大学地域共同研究センター講演会
「情報化社会と地域の活性化」
- 12/14 早稲田大学 講義
- 12/19 兵庫県マザーテレサ調査研究会
講演「マルチメディア時代の行政と情報化」
- 96/1/16 ベネッセ
講演「情報革命とニュービジネス」
<取材>
- 11/16 電絃新聞

11/22 信濃毎日新聞「地方からNTT分離分割問題を考える」

12/4 NTTData
12/5 読売新聞

■会津 泉<講演>

- 95.10.5 國際メデイア研究財団・第6回IMRFセミナー／パネル「インターネットがもたらす社会改革」
- 95.10.12 Multimedia Forum・The Economist Conference
- 95.10.13 (財)北陸産業活性化センター 富山県マルチメディアシンポジウム／パネル「マルチメディア時代のビジネスチャンス」
- 95.10.14 東海大学湘南キャンパス・ハイパー・メディア研究会／パネル
- 95.10.18 (財)地方自治情報センター・地方自治体コミュニケーションフォーラム'95／パネル
- 95.10.26 日本織維事業協会／講演「産業界とMM～インターネットを利用して」
- 95.10.27 (株)いわきテレワークセンター・いわきインターネット研究会／講演
- 95.11.2 (株)日本電気・リティルシステム研究会／講演「インターネットの現状と今後」
- 95.11.2 (株)野村総合研究所・研究会／講演
- 95.11.9 (財)電気通信振興会・放送政策講演会／講演「インターネットの進化」
- 95.11.18 NTT通信同窓会「平成7年度九州地方大会」/特別講演「マルチメディアビジネスの今後の展開」
- 95.11.27 神戸インターネットエープ'95／講演「市民が検証する災害時の情報ライン」
- 95.12.1 虎ノ門インターネット研究会／講演
- 95.12.4 神奈川自治総合研究センター・職員研修会／基調講演「ネットワークが社会を変える」
- 95.12.13 郵政研究所情報通信システム研究室・講演会「インターネットの利用による産業発展の可能性」<寄稿>
 - ・IAJ NEWS Vol.2No.3 「INET95 参加報告」
 - ・NIRA REVIEW (AUTUMN 1995) 「THE EMERGENCE OF NETIZENS: THE CULTURAL IMPACT OF NETWORK EVOLUTION IN JAPAN」
 - ・第六回IMRFセミナー抄録「インターネットがもたらす社会改革」(12.12.発行)
 - ・月刊keidanren (1996.1) 「進化するネットワーク」
 - ・西日本新聞 1996.1.1. (月) 21世紀特集19面「超分散型ネット...求められる責任」
 - ・維持情報 (No.222) 「産業界とマルチメディアのかかわりインターネットを活用してー」
 - ・LS研 (新春号 1996 NO.67) 「マルチメディア時代の企業情報化」
 - ・季刊 コングレス&コンベンション (創刊50号記念号) 「ネットワーク環境の整備は急務」
 - ・AERA 96.1.29号コメントリー (インターネット)<取材・来訪・その他>
- 95.10.3 毎日新聞山田様／取材
- 95.10.5 UPU柴原様／取材 (IBMホームページ掲載)
- 95.10.19 日刊スポーツ新聞木屋様／取材
- 95.10.24 時事通信荒木様／来訪
- 95.10.29 TBS寺島様／来訪
- 95.11.8 ハイビジョン普及センター小栗様／来訪
- 95.11.9 ITJ 小川社長様／来訪
- 95.11.10 日経エックス大橋様／取材
- 95.11.13 ダイヤモンドタイプ／取材
- 95.11.13 ICS企画／インタビュー取材
- 95.11.13 TBS「News 23」出演
- 95.11.15 Mr. David Boardman シアトルタイムズ/取材
- 95.11.16 日本経渃新聞／取材
- 95.11.17 中日新聞島田様／取材
- 95.11.17 ユニカルインターナショナル佐々木様/来訪
- 95.11.29 Mr. Bob Jung /来訪
- 95.11.29 Mr. Loeffler 氏/来訪
- 95.12.5 郵政研究所横井様、他2名/来訪
- 95.12.5 電通田村様／来訪
- 95.12.6 Mr. A. Bressand (PROMETEE) /来訪
- 95.12.6 花王橋山様／取材
- 95.12.7 朝日エアラ浜田様／取材
- 95.12.7 日経アジア部川添様／取材
- 95.12.15 朝日新聞斎藤様／来訪
- 95.12.15 富士通藤井様／来訪
- 95.12.19 日経渡辺様／来訪
- 95.12.19 池田仰様／来訪
- 95.12.21 日経大賀様取材／来訪
- 95.12.21 山形県企画調整部企画調整課青柳様／来訪
- 95.12.25 茨城県企画調整課／来訪
- 95.12.25 JTB井上様・斎藤様／来訪
- 95.12.28 米国大使館 Mr. McHale /来訪
- 95.12.28 第一企画高瀬・佐藤様／来訪
- 96.1.10 朝日新聞安井様／来訪
- 96.1.11 日本イベント産業振興協会ヒアリング／通産省訪問
- 96.1.11 日経ベンチャー沖本様／取材
- 96.1.16 サン・マイクロシステムズ小鍋様／来訪
- 96.1.24 日経赤木様／来訪

■藤野幸嗣<講演>

- 7月 10日 関西公共ネットワーク会議
- 7月 11日 APEC事務局
インターネット講習
- 7月 26日 大分県地域経渃情報センター研修会
- 8月 2日 中小企業事業団研修会
- 8月 16日 大分銀行本店 講習会
- 8月 25日 鹿児島県庁 研修会
- 9月 26日 NTTデータ通信
関西支社利用者研究会
- 10月 2日 大分経渃同友会研究会
- 10月 25日 岐阜県 地方自治大学校講習
- 1月 18日 日田商工会議所講習会
- 1月 19日 トキハ職員研修会
- 1月 27日 タナベグループ研修会
- <雑誌寄稿>
 - ・インターネット・サーファー創刊号「インターネット素朴な疑問」
 - ・インターネット・サーファー No.2 「メーリング・リストに参加してみよう」

■平成6年度報告書

- ・通商産業省委託調査「情報化推進基盤整備 マルチメディア・ネットワークの利用方策に関する調査」
- ・大分県委託調査「CATV等普及対策検討委員会報告書」
- ・大分県委託調査「次世代情報通信ネットワークモデル構想に関する調査報告書」
- ・日本自転車振興会「ハイパー・ネットワーク社会構造基礎研究 地域情報インフラとインターネットの統合環境の構築に係る調査研究報告書」

●ハイパーネットワーク社会研究所大分本部 移転のお知らせ

今号のハイパーフラッシュでご紹介したとおり、(財)ハイパーネットワーク社会研究所大分本部は、業務拡張に伴い本年1月26日に、旧事務所(大分市ソフトパーク内大分ソフィアプラザビル4F)から、はす向かいのビル(同パーク内大分第2ソフィアプラザビル1F)に転居いたしました。(下図のとおり)

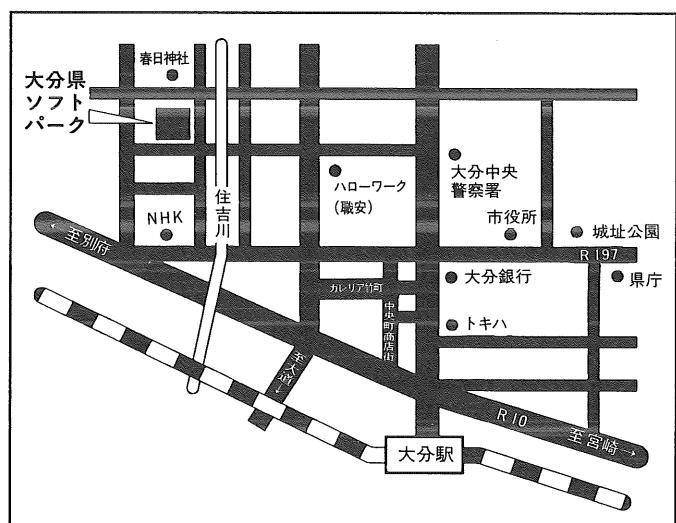
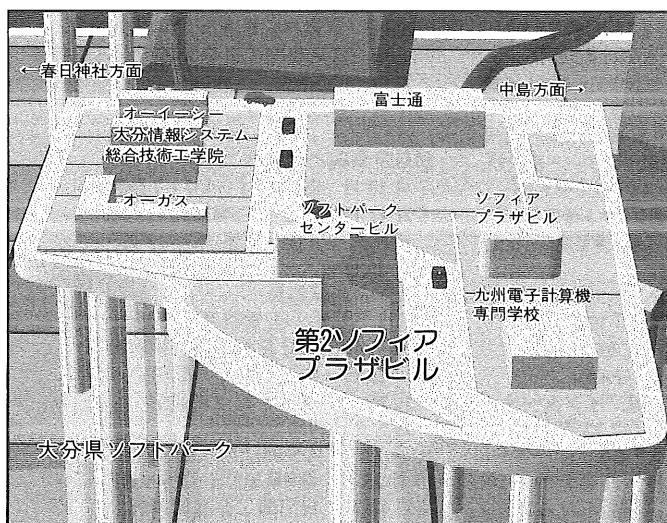
これまでの手狭な事務所に比べ

て面積的には3.5倍、機能的にもサーバルーム、デジタルスタジオ、マルチメディア工房等を完備したマルチメディアネットワークセンターとなっております。もちろん、インターネットへのアクセススペースも用意しておりますので、皆様こぞってご来場くださいますようご案内申し上げます。

また、当研究所設立の際の議論

と活動の母体となった大分の公共パソコンネットワーク ニューCOARAの事務局も、同居することとなりました。地域におけるRII(地域情報基盤)の確立と発展に向けて、これまで以上に両者一心同体の活動を行うことになりますので、皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

なお、電話、ファックス、e-mailアドレスは今までどおりです。



原稿募集

皆さんの原稿を募集しています。皆さんの身近なネットワークや地域コミュニティに関する話題、日ごろハイパーネットワークについて考えていること、ハイパー研について言いたいことなど、どしどしハイパー研宛てにお寄せください。

電子メールでお願いできれば幸いです。

e-mail:hyper@fat.coara.or.jp

お問い合わせは

(財)ハイパーネットワーク社会研究所
・大分本部
〒870 大分県大分市東春日町51-6
大分第2ソフィアプラザビル1F
TEL:0975-37-8180
FAX:0975-37-8820
・東京事務所
〒106 東京都港区六本木6-15-21
ハーツ六本木ビル2F
TEL:03-3402-8180
FAX:03-3402-8183
e-mail:hyper@fat.coara.or.jp

発行

(財)ハイパーネットワーク社会研究所
編集責任:会津 泉
編 集:武本幹雄

1996年1月29日発行